



しめやかに原田翁の市葬

翁の冥福を祈り多数の市民が参列

さる昭和四十六年十一月二十九日、逝去された名誉市民（元留萌市長）原田太八翁の葬儀は、留萌市二度目の市葬として、十二月二日、市立留萌小学校体育館で執り行なわれました。生前の原田翁を偲び、焼香などに参列された市民は、二日のお通夜が千五百人の人でうずまき、原田翁の人柄をしのぼせる。

昨年一月、今は亡き名誉市民小沢友平翁に続いて二度目の市葬は十二月二日のお通夜、三日には告別式が午前十時から始まり、十時五分、サイレンを黙聴する中、参列者、市民が翁を偲一分間の黙とうを捧げ、現留萌市発展の礎石を築かれた翁の冥福を祈りました。静かに読経の流れる中を、葬儀委員長原田市長（原田市長が喪主のため鷹橋助役が代理）を始め堀松副委員長（留萌市議会議長）や来賓の方々から翁への弔詞が読みあげられました。

「翁の生涯は留萌の歴史と切り離すことはできないでしょう。戦後の混乱期から力強く立ち上った留萌の街は、翁の尽力の賜であり、特に初代市長として将来を洞察し、積極的な市政を推進し、留萌市発展の揺ぎない基礎を築かれた偉業を偲び、より積極的な市政運営を進めま」と、数々の弔詞、弔電が披露されました。

「さようなら原田翁」

眠



◀市政特別功労章を受ける（29年）



▼旭日章を受ける（42年）



◀初代留萌市長として執務当時の翁



▲港まつりで1日船長（S30年）

▼初の親子市長誕生（37年）



ありひ日の原田翁

— 留萌建設の父を偲んで —

初代留萌市長・留萌市特別功労者・名誉市民

さようなら原田翁

▼サンタクロースに扮装して子供たちと（25年）



▼留萌祭りで馬上姿も勇ましく（28年）



▼高松宮来市の際のお出迎え（32年）



▼戦後の困乱期を迎え進駐軍が留萌へ駐留（23年）



原田翁の足跡

留萌の街づくりに、その生涯を捧げた名誉市民原田太八翁は、さる昭和四十六年十一月二十九日、静かに八十三年の生涯を閉じ、永遠の眠りにつかれました。ここで翁のあゆみを偲んでみることにしましょう。

原田太八翁は、明治二十一年十月、富山県で農業を営む父助次郎氏の三男として出生され、明治二十九年、九歳にして父母とともに藤山農場に移住されました。

明治三十二年、藤山尋常小学校を終え農業に従事、その後雑貨商などを営み、大正十三年に木材関係事業に転向されました。その後、十有五年にわたって農村経済の再建に努力を重ねられ、現留萌農村の発展の大きな基礎を築いたといえます。また、経営的手腕も高く、各種企業の創設と経営は、留萌地域の産業、経済史上にも輝かしい功績を放っています。

また、公職歴は古く、昭和三年留萌町議会議員として初当選、以来十九年間にわたる町政に貢献、昭和二十二年には町長に立候補し同年十月、留萌市誕生（市政施行）に伴い、初代留萌市長に就任されました。戦後の混乱期の中を、道北屈指の港湾都市として今ある留萌市のゆるぎない基礎を築き上げたといえます。

明治、大正、昭和と三代にわたる留萌市の歩みとともに、原田翁の夢を一層大きく託された留萌の街づくりには、太八翁の次男である現市長原田栄一氏を動かす、全国でも珍しい親子二代市長の誕生として引継がれてきました。

また、翁の活躍とその業績は輝やかな表彰などによって彩どられていくといえます。

- 昭和二十九年 眞明皇后記念救災事業により紺綬褒章を受ける
- 昭和二十九年 留萌市特別功労章を受ける
- 昭和三十年 地方自治振興の功績で知事表彰
- 昭和三十一年 道消防協会会長表彰を受ける
- 昭和三十一年 道商工会議所連合会頭表彰を受ける
- 昭和三十一年 再度紺綬褒章を受ける
- 昭和四十二年 勲五等双光旭日章を受ける